リスク社会時代の児童文学

第六回　リスク社会のシミュレーション

目黒　強

一　はじめに

リスク社会でリスクが個人化するのは、既存の中間集団が弱体化したからであった。だとすれば、機能不全に陥った中間集団を補完することが求められる。しかしながら、中間集団の補完は容易ではないため、新旧の中間集団に頼らずにリスク社会を生き延びるための知恵も必要となる。

そこで今回は、リスク化した中間集団を補完する方法と個人化したリスクに対処する知恵を描いた作品を検討する。

二　中間集団の補完

（一）　子ども食堂

中間集団の補完を描いた作品として最初に取り上げるのは、栗沢まり『15歳、ぬけがら』（講談社、二〇一七年）である。

主人公の麻美は、生活保護を受けている母子家庭の中三の女の子である。心療内科に通っている母親にネグレクトされ、食事も満足に摂ることができずにいる。夏休みに入り、頼みの綱であった給食を食べられなくて困っていた時に出合ったのが「まなび～」という学習支援塾であった。無料で提供される食事を通して身も心も満たされた麻美は、小学生に食事を提供する居場所作りを決意する。

まずは、麻美が置かれている状況を確認しておきたい。

「母さん。水が」／「う」／居間続きの四畳半から、母さんのくぐもった声が聞こえた。この和室のカーテンはいつでも閉めっぱなし。（二八頁）

水道が止められていることに加え、母親には状況を気にかける余裕もない。麻美の家庭は、物質的にも精神的にも、